

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「イロコイ のお話」

今回は格調高く「イロコイ」のお話をいたします。（コホン）

「ナーニが格調高いんだね？」

「なになに、なんだて、イロコイかね・・・」
と思った方すみません。イロコイ、そう「色鯉」、泳ぐ宝石錦鯉（ニシキゴイ）のお話です。

新潟県の小千谷市と旧山古志村、つまりかつて越後二十村郷と呼ばれた地域はその発祥の地です。町村合併のため、現在の小千谷市、川口町、そして長岡市の地域ですが、いずれも雪深い山間地の産業で、全国的にも有名です。

この錦鯉の別名、というよりも、かつての名称が「イロコイ（色鯉）」で、明治の初めまでこの名で通っていたのでした。

ところが、明治の初年、
「イロコイでは、色恋に通じる。けしからんねえ！」

とすることで、突如新潟県から「イロコイ禁止命令」が出たのです。

しかし当時、鯉は鑑賞用というよりも、雪深いこの地では、コイは冬場の貴重なタンパク源としてなじみ深いものであったため、

「コイは鯉でも、食べるコイだて、そう目くじらたてんでもいいこて・・・」

と言ったかどうかは定かではありませんが、鑑賞用を「イロコイ」、食用を「コイ」と呼んでいました。

（もっとも、イロコイの稚魚を「はねコイ」と呼んで食していたこともあったそうですし、食用の物産として販売していたこともありました。）

さて、そんなイロコイも、時は太平洋戦争を迎えると、

「この時局にイロコイなぞ不届き千番もってのほか。全くもってけしからん！！早速名前を変更せよ！」とのことで、「イロコイ」改め、「錦のごとく美しい大日本の鯉」ということで、「錦鯉」の名称になったのです。

この名称、調べてみてもどこのどなたが考えたか記録が残っていないのですが、赤や朱、金銀、黄色、紅白、薄墨色とまさに錦絵のような色合いは、泳ぐ宝石にふさわしい名前だと思います。「イロコイ」から「錦鯉」へ、これぞネーミング効果といえましょう。

新潟県のイロコイの始まりは、元和年間（江戸時代）に京都知恩院から伝来した鯉を越後二十村郷で飼育したとも、信濃川にいたとも伝えられています。

ほかに、灌漑用のため池に飼っていた「コイ」の突然変異で「イロコイ」が発生したともいわれていますが、ことの真相はいかに・・・。

当時、はるか遠くの京より、どうやって輸送したかや、突然変異でどんな模様になったかが気になると言えば気になりますが、そこはイロコイを追及するのは野暮というものです。

ゆらゆらと陽炎のぼる春の午後、イロコイに目を楽ませるのも贅沢な時間かと思います。

